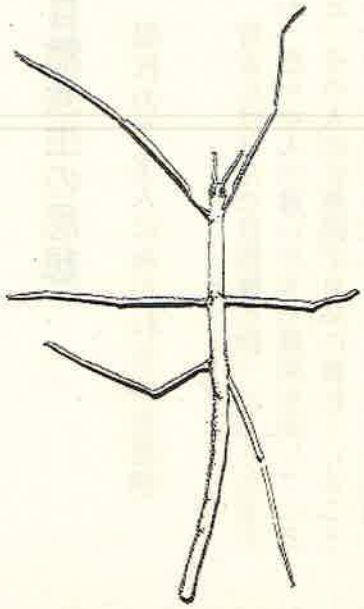
No. 6

やまぐち自然派宣言



自然共生の思想

リレーミーティングin角島を振り返る

モデルエコツアー

自然共生ミニシンポジウム

山口の自然はいま

山口のアカマツ林

石柱渓

椹野川河口域宇・千潟再生協議会

共生

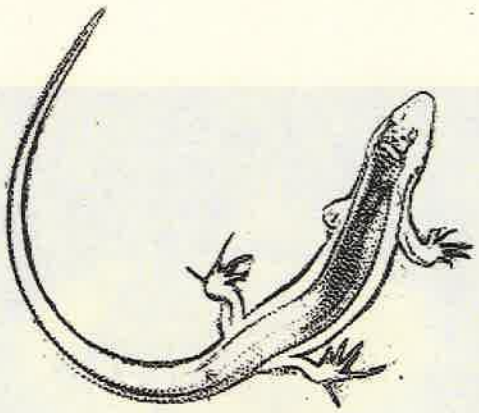
共生随筆

自然にアプローチする「窓口」を

クモを調べてみませんか

野生動物との関係

花の伝説



やまぐち自然共生ネットワーク

平成19年12月25日

自然共生の思想

現代の文化人にみられる共生思想

皆さんはどんな自然観を持っておられますか。色々な人の書いた本や講演を聞いていると、その人の自然観が自然に表れていることが分かる。現代の文化人は、どんな自然観を持ち、共生思想を育んだかを探究することは興味深い。

山口県を代表する詩人山頭火はたくさんの俳句をつくった。俳句といっても、芭蕉や正岡子規の俳句とはひと味違った自由律句だ。

山頭火は放浪の歌人で、各地を歩き、人や自然を詠った。極限状態の孤独を味わいながら、それでも自分の回りには自然があることを意識している。つまり山頭火は人が自然に生かされ、自然と一体であることを意識した歌人であった。仏教徒である山頭火の自然観は仏教に根ざしたものだったのだろう。

ここを墓場として曼珠沙華萌ゆる
朝からはだかでとんぼとまる
やっぱり一人はさみしい枯草
鴉啼いてわたしも一人

山口県を代表する作家に宇野千代がいる。宇野さんも、自然が大好きで、生涯自然を友にした。特に桜が好きだった。樹齢千三百年という薄墨桜が弱っているのを見て、なんとしてでも再生したいと考え、実行する。この話は小説にも書かれている。そしてその薄墨桜はみごとに生き返る。

宇野さんの桜好きは、着物のデザインにも桜を多用していることからも分かるだろう。満開の桜を着物に描き出す。着ている人は桜のエネルギーを全身で受け止めるように見える。夏の浴衣にも桜がいっぱい出てくる。宇野千代は文字通り自然と共生した人だった。

多くの科学者は「自然」の対局には「ヒト」を位置づける。もちろん人は自然の一員として生態系を構成する存在に間違いない。生態系を構成する生き物は種を単位として存在する。種の形成はダーウインによって解明され、自然が造りだしたことが分かった。

自然界にはたくさんの種が存在し、人もヒトという種なのだ。そのヒトも長い年月をかけてサルの仲間から進化してきた。ヒトになる進化（ヒト化）では、直立二足歩行による移動様式、言語によるコミュニケーションの確立、社会のレベルでは家族という基本的社会単位を持つことといった面が注目された。

ヒトが野生生物として餌を狩猟・採集する段階から、栽培や飼育により豊富な食料を手に入れるようになると、ヒトも自分を自己家畜化するようになる。家畜であるブタは猪を家畜にした。ブタは朝から晩まで寝ては食べる生活を繰り返し、体はぶくぶく太ったが、野生の鋭さは消えてしまった。人は文明社会を築き、会社勤めをはじめると、服を着て、革靴を履いて、自動車で通勤する。こうしてヒトは自分たちの築いた文明のもとで、どんどん独自の進化を遂げて行く。

そればかりか人は自分を取り巻く自然にも積極的に働きかけ、自然の「人間化」をすすめて行く。東京を考えてみるとよい。昔の大自然はヒトのすむ都市への大改造が達成された。木に変わってビルが建ち並んでいった。地面だって、コンクリートでおおわれてしまった。人の手の加わらない自然は稀だろう。

「この地球上に残る自然は早かれ遅かれ、いずれも皆人間化されざるを得ないだろう。今になって自然の保護地を作ってみても、それさえが人間化された自然に過ぎない」と嘆く科学者も多い。

「外なる自然」に対して「内なる自然」というのがある。サルだって自分が産んだ子を愛しく思い、可愛がる。動物の進化の過程で、こんな心が発達してきたのだ。花をみると美しいと感じる心、自分が生んだ子供は無条件で愛しいと感じる心はヒトにも獲得されている。ノーベル賞をもらったローレンツはこういった心も遺伝的に人に組み込まれていることを解明した。

ところが、この「内なる自然」も最近では破壊されはじめているように見える。花をみても美しいと感じなくなる人がいたり、我が子も可愛いと思わない人も現れてきた。その原因を考えると、人が自然から離れてしまい、自然を体で感じる機会を失ったからだという。自然は人の体にどんどん入り込んで行くのである。

今年はイノシシ年で、年賀状にはイノシシが美しく描かれていた。田や畑を荒らし回るイノシシをこんなにも大事にするのはどうしてだろう。昔の人はイノシシを神の宿る生き物、いや自分たちの腕白な息子達のように温かく見ていたからに違いない。山に住む動物たちは、先住民だった。そこで共生するために山と里の間にシシ垣を築いた。石と土をこねて、万里の長城の様な垣を設置した。こうして人はイノシシと棲み分けて共生を図った。

現代に生きる私たちはあまりにも、イノシシやクマのことを知らなすぎる。もっと自然にふれ合って、自然や虫や草のことを体で知るようにしなければならない。シカやイノシシが可愛い息子に感じることだった。

河合雅雄さんは「野や山は動物たちとの共有地だ。動物たちはそこでそれぞれの生活を持ち、動的な調和の世界、つまり生態系を作り上げてきた。ところが人間は自然環境とは別に文化という独自で多様な環境を持つようになったため、有毒物質の無差別な投与、森林の伐採、生物の大量虐殺といった行為で自然を改変し、自分らだけに役立つ人工系を作るために、腐心している。

さまざまな種が共存するという自然の掟を破った人類は、自分たちだけが幸福を得、自分たちだけが生き残るという幻想の中で、いずれ自分自身を滅ぼすことになろう。」と述べ、人類に大きな警告を発してきた。

日本文化の基本構造になっている共生の思想をもっと真剣に考えなければならないと思う。

（庫本　正）

リレーミーティング in 角島を振り返る

豊北町自然観察指導員会　伊藤忠雄

一　引き継ぎから開催まで

平成18年10月、錦川流域での交流会において、次回開催地が角島にリレーされ、開催の時期は、角島にふさわしい夏ということになりました。

自然環境と人との共生を考えようとするとき、開催地が山から川・海へと引き継がれたことは、ごく自然な流れであったでしょう。

写真１　角島大橋と海士ヶ瀬海峡

引受団体となった豊北町自然観察指導員会では、早遠準備のための情報収集を始め、平成19年1月に県庁で開催される事務局及び自然保護課との開催打合せ会に備えました。

以後、次のように実行委員会につないで、平成19年9月8、9日の当日を迎えました。

＊1月22日～3月24日
関係団体と連絡調整を行いながら実施要領案を検討

＊5月9日　第1回実行委員会（角島）
開催日、概要、協力体制等確認（事務局、自然保護課、下関市豊北総合支所、地元協力団体、地元実行委員会）

＊5月19日　第2回実行委員会（角島）
実施要領と準備案検討

6月9日　（山口市）
やまぐち自然共生ネットワーク通常総会において角島での開催を参加者に案内

6日16日　実行委員会代表者会（角島）
総会報告

＊7月6日　第3回実行委員会（角島）
実施要領、プログラム等最終検討

＊7月27日　第4回実行委員会（角島）
募集リーフレットと準備役割分担の検討

＊8月28日　第5回実行委員会（角島）
準備の進捗状況等確認

＊9月7日　第6回実行委員会（角島）
前日最終打合せ

※ ＊は実行委員会

実施にあたっては共催の下関市、特に豊北総合支所の関係職員をはじめ、協力団体の角島地区振興協議会（古野会長及び婦人部）、角島漁業協同組合（森澄組合長及び鮮魚取扱の中野社長）、豊北町観光協会（工藤会長）、ほか角島地域の方々の深いご理解のもと心強いご支援を受け、無事成功のうちに終了することができました。

この紙面にて、厚くお礼を申し上げます。

二　イベントと成果Ⅰ（9月8日・土）

1　角島クルーズ（海からの角島景観観察会）

やまぐち自然共生ネットワークリレーミーティングin角島の企画のはじめに、「**角島ならではのイベントとして、角島を海から眺めることができないか**」という案が出されました。陸上観察会に海上観察会を加えたら、参加の意欲を高められるという案でした。このことについて、当初地元の検討では、かつて角島に所有されていた多人数が乗船できる漁船が無くなり、対応が難しいこと、乗船許可申請や安全用具の調達等の面でも困難があり、実施は不可能とわかりました。

ところが、地元藤岡実行委員の知人に、青海島観光船経営者がいて、観光船を借りる話が進み、一挙に難問が解決して**海からの角島景観観察会「角島クルーズ」**が可能となりました。

写真２　角島クルーズ

クルーズ当日は好天に恵まれ、海士ケ瀬のコバルトブルーの海面から、角島大橋を見上げて通ることができました。あいにく少々波が高くて、外海に出ることができませんでしたので、一同、少々心残りはありましたが、テレビカメラによる海中観察もできて、ほぼ満足していただけたのではないかと思います。そして、自然と人との付き合いの難しさも感じられたのではないでしょうか。

乗船者は、午前と午後、スタッフを加えて70名余り、大成功であったと思います。

2　大浜海岸クリーン大作戦

リレーミーティングin角島の会場の大浜海岸は、7月と8月の間、海水浴やキャンプ場として使用され、終了直後のメンテナンスが行われていましたが、渚や周辺の海岸植生の隙間には漂着ゴミが残り、それに混じって、キャンプで使用した用具がそのまま放置されていました。

写真３　大浜海岸クリーン作戦

クリーン作業の参加者が、大変熱心に作業に取り組まれただけに、この利用者のマナーの悪さを目にして、自然の利用や過ごさせ方の問題点を実感されたことでしょう。

写真４　野外炊事の放棄物

作業は午前・午後の2回行い、プラスティック・ビニール・瓶缶等の人工物に限って収拾し、およそ580kgが集められました。

収拾したゴミは、下関市豊北総合支所の職員によって処理場に運搬されました。休日にもかかわらず協力いただいた方々に、厚くお礼を申しあげます。

なお、このクリーン大作戦で使用した火ばさみ等と、二日目に実施した島内自然観察会で設置した看板は、『県民協働型自然共生手づくり事業』の採択を受けて実施したものです。

3　角島ミーティング

午後2時30分開始　参加者79名

共催の下関市江島潔市長、地元引受団体の熊井清雄代表歓迎のことばに続いて、同会々員による地域の自然の紹介発表を行い、それらを基に、参加者との意見交換を行いました。

（1）角島の魅力紹介

①　角島の自然と歴史・・・伊藤忠雄

角島の自然環境の変化と、それによって育まれた、角島の歴史を知る最古の手がかりは縄文時代早期とされる黒曜石製の鏃が出土したことにあります。それは、今からおよそ7、8千年前の角島の人の祖先の生活を示す証でもあります。

その頃は、日本海の海水面が現在よりも20ｍも低く、現在の角島にあたる範囲は陸地となっていて、日本海に突き出た半島の山頂付近であったことが推定できます。

したがって、角島は存在していませんでした。その後、海水面の上昇が続き（縄文海進という）、そのピーク6千年前頃に海士ケ瀬海峡（写真1）が生じ、角島が出現したのです。

角島の自然環境は、この島となる前からの長い年月の中で形成され、その中で、自然との共生の歴史が育まれ、現在に残されているといえます。その歴史が、橋が架かることによって崩されてはならないことを訴えたかったのです。

しかしながら、発表では準備の不足で意を伝えきれなかったことを反省し、この機会にお詫びを申し上げます。

②　油谷湾と角島海域の自然・・・杉村智幸

リレーミーティングの開催趣旨『リーフレット1・3頁』のように、油谷湾地域は、山地→川の流域→海域と移っていく自然環境の様子を観察できます。

角島は、その湾口に位置しているので、行政上の区分に係わらず、周辺の山地との関わりを密接に受けています。その油谷湾を中心とした海域の、豊かな漁業資源の源としての藻場の現状が紹介されました。

一般に環境問題の扱いは、陸上の環境に目が向きますが、目に触れにくい海面下（水面下）の実態について、人間生活との関わりの理解を深める発表でした。

豊富な実地調査や聞き取り調査資料をていねいに整理し、映像をうまく使った提示がなされ理解しやすいものでした。

ちなみに、杉村会員は、県内の貝類研究の第一人者で、角島大浜海岸海域のユリヤガイの保護活動にも係わっています。

（2）みんなで意見交換（司会　田中事務局長）

9名の参加者から、発表に対する質問のほか、1日目の感想などについて発言がありました。

（3）交流会（大浜野外ステージ）

午後6時開始　参加者60名

晴天に恵まれた夕刻、野外ステージの辺りは、角島特有の夕景色に包まれ、庫本会長、下関市長のあいさつで交流会が始まりました。

サンセットからトワイライトと変わっていく角島の自然からのお持てなしに、感嘆の声も上がり、交流会にも弾みがつきました。加えて、角島漁協関連の中野鮮魚社長自らの、生きのいい刺し身づくり実演サービス、市豊北総合支所と地元実行委員スタッフによ

るサザエやイカの浜焼きの香りは、一段と雰囲気を盛り上げました。

写真５　トワイライト交流会

参会者一同、大いに語り合い、今後の活動への英気を養うとともに、リレーミーティングin角島の良い思い出づくりができたと感じています。

三　イベントと成果Ⅱ（９月９日・日）

１　島内自然観察会

二日目は、リレーミーティングin角島の主イベント、島内自然観察会から始まりました。９時から午前中、２時間半をかけて、尾山コース、元山コースの二手に分かれて実施し、元山コースは時間不足となるので、牧崎の入り口まで自家用車に分乗して移動しました。

参加者は当日参加を加え、尾山コース32名、元山コース42名、合計74名となりました。

各コースの最終地点である夢崎と牧崎では、リレーミーティングin角島のメモリアルとして、活動の目的を示す自然共生啓発表示看板の設置準備を行いました。（※設置完了は９月30日となった。）なお、この看板製作は、クリーン大作戦と同じ『県民協働型自然共生手づくり事業』の採択を受けて実施しました。

以下、実施報告を要約して記載します。

（１）尾山コース（つのしま自然館～尾山港～尾山～田の尻～角島灯台～自然館）

尾山港は、砂浜を埋め立てて造られました。田の尻からは、遠く九州が望まれます。

田の尻から角島灯台に抜ける山道で、ノシラン・ヤブラン・センニンソウ・クズ等の植物を観察できました。特に、紫色のクズの花が満開で美しく、キクラゲの生えた木も観察できました。

また、道沿いに堆積した尾山礫層の観察から、角島の昔の海水面を推定することができました。

写真６　尾山コース

夢崎には、ハマオモトマユウ）の日本海側の北限に近い自然群落があります。

写真７　夢崎で看板を囲んで

この貴重な植物を、盗掘や損傷から守るため、意識啓発の看板設置場所を検討しました。

(2) 元山コース(つのしま自然館～戦争遺跡～棚田～牧崎～つのしま自然館)

出発地点のつのしま自然館前の池の周りで角島自生の絶滅危倶植物デンジソウなどの保護育成の様子を観察し、角島の自然環境や人の生活と植物との関わりを考察しました。

写真８　デンジソウの保護育成

自家用車に分乗して牧崎に向かう途中、元山最高海抜70 m地点付近で、旧陸軍の砲台跡を見学し、角島に関わる昭和史の一片にふれました。

牧崎入り口の無井地峡では、東側に、かつて角島の文物流通港と言われる無井港、西側には棚田が開け、角島灯台を見通せました。棚田の存在からは、元山の地質構造の恵み、地下水の湧出を理解することができました。

デンジソウの自生地もこの辺りです。

写真９　高木自然林のトンネルを過ぎ牧崎へ

角島の自然景観残しの一つ、高木の自然トンネルを抜けると、牧崎の玄武岩溶岩台地が開けます。牧崎は強風の影響で草木が地を這うように育ち、草原となっています。その中に風下に靡いたハマヒサカキの風障木の茂みが点在して目を惹きます。それらに護られるかのようにスミレ・カワラナデシコ・ダルマギク等、四季の草花が彩りを添えています。

この草原には、千三百年前から牛の牧場が設けられ、時の為政者に産物や牛の献上がなされた史実があり、牧崎の地名はその史実から付けられたものと分かりました。

この雄大な自然と歴史の残る癒しの景観を、盗掘や損傷から護るために、夢崎と同じく意識啓発の看板設置場所を検討しました。

写真 10　牧崎で看板を囲んで

2　基調講演（要旨を記載）

午後0時40分開始　聴講者80名

『森は海の恋人「角島の自然からの伝言」』

愛媛大学名誉教授・・・熊井清雄

開会に先立ち、主催者である庫本会長、共催者である山口県環境生活部大田審議監のあいさつののち、熊井つのしま自然館館長から海洋に関する研究成果の紹介、漁業と資源管理の重要性や、角島における漁業と自然保護について基調講演が行われました。

以下に項目を略記します。

（1）海洋について

①明らかになりつつある海洋の姿

②豊かな海底資源

③潜水調査の活躍と深海生物の実態究明

④海水の流れと漁業になる豊かな漁場

（2）森は海の恋人（魚族保護）

①北海道漁連各漁協による「木を植えて魚を殖やす」「神の魚を呼び戻す」運動の紹介

②畠山氏による「牡蠣の森を慕う会」の植林運動の紹介

③森はどのようにして海を養うのか（森―川―海の連環）　磯焼け現象（道立水産試験場の研究）（フルボ酸鉄の働き）

（3）現地角島からのメッセージ（伝言）

①角島の漁業と資源管理

②観光によって失われる自然と海浜植物群落の保護の実態の報告

まとめとして、「人間活動の抑制・資源の循環と省資源・自然との共生」の思想のもと、角島における実践に向けた行動の触発がなされました。

3　感想発表会　（司会　田中事務局長）

基調講演が終了したあと14時30分まで、聴講者の中から、20名に及ぶ活発な発表がなされ、大変有意義な思いのうちに終了できました。

四　閉会行事

庫本会長の閉会あいさつののち、来年度の開催地域となる山口市の「椹の川流域地域通貨・連携促進協議会」の岡事務局長より引受のあいさつがあり、次年度の再会を約束して解散となりました。

実行委員会のみなさんお疲れ様でした

五　参加者から提出された感想文から（抜粋）

・植物・星・海の生物等、その道の方が説明してくださり本当に勉強になった。

・改めて一人一人が小さな事からでも気を付けていく必要性を感じた。

・色々な人たちに励ましの言葉等いただいた。環境保全の根本は心の問題と改めて感じた。

・角島の海の青さはいつ来ても心を洗われる。これからも皆で守ってほしい。

・クリーン作戦でゴミの多さに驚いた。自然を愛するために孫達に教えてあげたい。

・角島の美しい自然を保つために「自分は何をすればいいのか」を強く感じた2日間だった。

・夕食は海鮮料理もたくさんあったのでむすび2個位でいいのでは、もう少し質素に。

・想像以上に浜にゴミがありびっくりした。マナーも悪いが取り締まりをもっと厳しく。

・講演とフィールドワークの2本立てでとても充実していた。

・角島の成り立ち、植生、動物（特にタカの標本展示）クルージングを満喫できた。

・「ストップ ザ ごみ」キャンペーンを各団体で進めることが必要。

・クルージングでは説明が聞き取れなかった。

・参加者の食事のゴミが減らせないものか。次回はマイコップ、マイお茶をすすめよう。

・感想発表会が有意義だった。

・普段行かないところが見学できて良かった。

・島外から持ち込まれたゴミが放置されていることは許せない。看板が必要では。

・スタッフの皆様ありがとう

モデルエコツアー

六月九日、やまぐち自然共生ネットワーク通常総会の開催に先立ち、午前中、山口市において二つのモデルエコツアーが実施されました。概要は次のとおりです。

Aコース（歴史文化散策コース）
参加者四十名

藩庁門→山口博物館→一の坂川→八坂神社→菜香亭→雲谷庵跡→瑠璃光寺五重塔（記念撮影）→洞春寺→旧県会議事堂

今回のツアーでは、全行程のガイドを山口市観光ボランティアガイドの方にお願いし、山口博物館では特別に収蔵庫の見学をさせていただきました。また、菜香亭でも専門のスタッフの説明があり、エコツアーならではの充実した散策をすることができました。

それぞれの歴史的建造物等について理解が深まったのはもちろんですが、特に、桜とホタルが有名で一帯が国の天然記念物に指定されている一の坂川では、自然の状態に見える川や桜の木が、日本で初めてのホタル護岸工事によるものとの説明があり、参加者一同感心していました。

Bコース（東鳳翩山散策コース）
参加者三十名

二ツ堂登山口→山頂到着（記念撮影）→下山

東鳳翩山は標高七三四、二mの山で、平成十六年五月、著名な登山家である岩崎元郎さんにより、山口県では唯一「新日本百名山」に選ばれました。山頂からの眺望はすばらしく、三百六十度の視界が開け、遠くは日本海、瀬戸内海まで見ることができます。

今回のツアーでは、山口山岳会の方々のサポートで参加者（参加者の中には山登りが初めての方もいらっしゃいました）全員が無事に登頂することができました。

山口山岳会には、平成十八年度の手づくり事業（モデル実施）で東鳳翩山登山道の案内看板の設置、倒木等危険木の除去作業を実施していただきました。総会後の体験発表会ではこの時の苦労話などの発表がありました。

今回の二つのエコツアーの実施により、歴史散策コースでは、国宝、国、県、市の重要文化財、国の天然記念物といった史跡がわずか一kmの範囲内にこんなにあったのかと改めて知ることができました。また、東鳳翩山散策コースでは、自然を感じながら登山する喜びを知りました。

普段何気なく見ていた建物、歩いていた道も、エコツアーという形で専門家の説明を聞くことで、そのすばらしさ、大切さを知ることができます。

今後とも、やまぐち自然共生ネットワークが中心となり、地域の特性を活かしたエコツアーを企画されること期待しています。

山口県環境生活部自然保護課

自然共生ミニシンポジウム

今年度の新規事業として自然共生ミニシンポジウムを11月18日（日）周防大島町の八幡生涯学習のむらを主会場として開催しました。

このミニシンポジウムは、加入団体の地域における活動を知るとともに、少人数でざっくばらんな意見交換を行うことを目的として実施したものです。

当日は、周防大島を代表する観光産業であるみかん狩り、周防大島自然体感クラブがスローフードスクールなどの体験学習の場として活用している畑での芋掘りなどを体験し、いい汗をかきました。そののち、八幡生涯学習のむらの付属施設、茅葺き屋根の古民家に移動し、かまどに火を熾し、ご飯と味噌汁を炊き、周防大島で捕れた新鮮なアジを炭火で焼いて食べました。時間はかかりましたが、参加者一同、昔を懐かしみながらの楽しい食事となりました。

午後からは周防大島町で活動している三団体の各代表から活動報告が行われたのち、意見交換を行いました。

「美しい三蒲を創る会」

昔きれいだった三蒲地区の山、海、道を昔のようにしたいと思い活動を始めた。竹を伐採し、いろいろな助成金を活用して桜、くぬぎの植林、菜の花、コスモスの種まきなどを行っている。

「ふるさと里山救援隊」

町内20ヶ所で竹を伐採し、ブルーベリーを植えたりお堂の保全などを行っている。どこかを拠点にやるのではなく、想いを持った人が何かをやろうとしている場所に行って、そこから活動の輪を拡げようとしている。

「周防大島自然体感クラブ」

周防大島町の豊かな自然を活用して地域活性化を図るために活動を始めた。現在、スローフードスクールや共同農園、研修・協働事業等を実施している。また、今年度から、八幡生涯学習のむらの指定管理者の指定を受けている。

活動報告の後、やまぐち自然共生ネットワークや参加者が日頃感じていることなどについて活発な意見交換が行われました。

今回のミニシンポジウムは初めての取組でしたが、加入団体の活動フィールドを直接見ることによって理解が深まるとともに、周防大島の方々との活発な意見交換によって、改めて地域の実情に応じた取組とネットワーク化の必要性を感じました。

二月には、椿まつりの開催に併せて、冬の自然観察会を萩地域で開催する予定にしています。

たくさんの方の参加をお待ちしています。

山口の自然はいま

山口のアカマツ林

“日本は森の国である”と称される。山口県もご他聞にもれず山がちな地勢と、温暖な気候や恵まれた降水量から、県土の七三％が森林で覆われている。このため身近な自然と云えば、森林をイメージされる方々が多いと思う。

昭和四一年六月、毎日新聞社の提唱で、県の木が選定されたとき、県民の多くが、県を代表とする木として「アカマツ」を選ばれた。その選定理由として、（一）山口県を象徴している、（二）林業上の重要な樹種である、（三）美観的価値がある、ことによるとされている。

この、山口県を代表とする木として選ばれたアカマツ（マツ林）が、いま、急速に姿を消しつつあり、これに替わって新たな森林景観と様々な事象が見られるようになった。

かつて、里山の森林景観といえば、明るいアカマツ林が想定されるほどアカマツが森林面積の四三％を占めていた（県林業統計書・昭和三六年度）。最新の林業統計書では一三％まで減少し、アカマツに変わってツブラジイやスダジイなどのシイ類やアラカシ、タブノキなどからなる照葉樹林に移行しつつある。中でもゴールデンウィークの頃、もくもくと盛り上がるように咲くシイ類の花（雄花序）を見ると、ここ十数年の間に急激にシイ類が繁茂している様子が観察されるようになった。

アカマツ林の減少の主原因は、マツノマダラカミキリがマツノザイセンチュウを伝播したことによりマツ枯れが発生したことが定説となっている。その他の要因としては一九六〇年代に入って、電気、石油、プロパンガス等の普及が急速に伸び、農山村の過疎化、都市近郊農村の体質変化とあいまって、マツ林から柴草等の採取がされなくなって、マツ林は放置状態になったことが大きい。このような状態が長く続くと、林内には高木となる広葉樹や潅木が密生し、過去のマツ林とは比較にならないほど林床が変化してくる。すなわち落葉がたまり土壌が徐々に肥沃になると、より豊かな植生が生育できるようになる。

このような植生の遷移と併せて、松くい虫被害によって県内の里山のどこでもみられた明るいアカマツ林が、昼間でも薄暗い照葉樹林に移行した。アカマツ林は、春になると美しいコバノミツバツツジの花が咲き、秋にはマツタケやクロカワ（方言名　クロコウ）やハツタケなどのキノコ狩りが楽しめたことなど、今は昔語りとなりつつある。

残り少ない銘木“滑松”（飯ヶ岳）

一方、アカマツ林に変わって勢力を増してきた照葉樹林内には、ヒラタケやキクラゲなどの木材腐朽菌類に属するキノコの発生が多く見られ、森林のキノコ層にも著しい変化があらわれており、今後ともこの傾向は進行するものと思われる。

“森は生きている”といわれる。森林は、自然環境に適応し他の生物と共生しながら、より安定した極相林へと遷移しつつある。アカマツ林への郷愁はあるものの、地球環境の保全という視点にたてば、照葉樹林化への流れも喜ばしいことかもしれない。

樹木医　藤原　俊廣

石柱渓（豊田県立自然公園）

今年の夏は暑かった。八月の猛暑の日、滝でもたずねて、清涼な水を楽しみたいと考え、石柱渓を訪ねました。この渓流には二十あまりの滝が連なり、国指定の名勝及び天然記念物になっているからです。

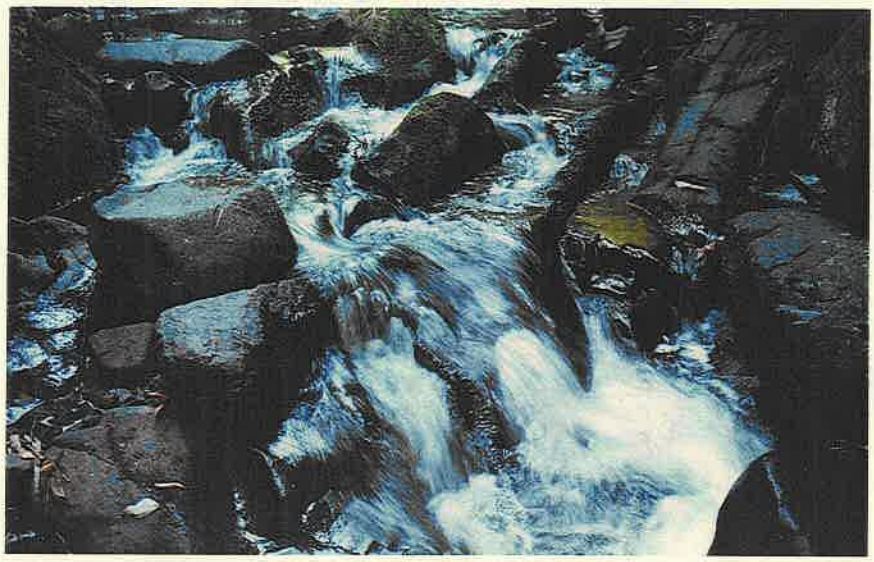
ところが、石柱渓を流れる水は赤茶色に濁っており、泡が流れ、ペットボトルが滝にひっかかっていました。おまけに峡谷にかかる橋は何となく危険を感じました。文化財としての管理はなされているのですが、地元観光協会が宣伝して、観光客の誘致に懸命なら、トイレやゴミの管理をしたいものです。

石柱渓では、五角形または六角形の柱状節理（たての割れ目）をもつ石英斑岩（火成岩）を流れる水がいくつかの滝や淵を造っています。

大正時代のこと、この不思議な渓流を地元の医師山崎敏一が注目し、郷土の画家であり、地学研究者であった高島北海に見ていただきました。北海はこの奇景を高く評価し、「石柱渓」と名付けました。この素晴らしい石柱渓は大正十五年十月二十日に史跡名勝天然記念物に指定され、保全されることになりました。

以後、約一キロにわたる渓流が自然愛好家に開放され、滝を楽しみながら渓流を散策できるように通路が造られています。丁度長門峡に似た風景で、多くの観光客の誘致に力が注がれました。地元には「石柱渓を愛する会」ができ、この団体がこの渓流の管理をしてきたのでしょう。

私が訪れたとき、立派なトイレも汚れており、水が出ない状態でした。みんなで修理したり、掃除したいものです。



椹野川（ふしのがわ）河口域・干潟自然再生協議会について

一　椹野川河口干潟等自然環境の特徴

椹野川は山口県の中央部、山口市北部の龍門岳等にその源を発し、山口盆地を潤し、山口や小郡の市街地を流れ、途中で仁保川、一の坂川、吉敷川、四十八瀬川など大小２４の支流と合流し、周防灘の山口湾に流入しています。

特に、山口湾のうち椹野川河口域から阿知須、岩屋に至る水域には、西瀬戸内地域有数の広大な干潟（約３５０ｈａ）が広がり、シベリアやカムチャツカから日本列島を縦断して東南アジアに向かう渡り鳥たちと、モンゴルや中国から朝鮮半島を経由し四国・九州へ横断する野鳥たちのクロスロードとなっており、日本の重要湿地５００にも選ばれています。

さらに、河口域には、絶滅危惧種であり、生きた化石ともいわれるカブトガニの生息地にもなっており、全国的にも非常に重要な地域の一つです。

二　自然再生をしなければならない状況が生まれた経緯

山口湾は、かつてはアサリなどの二枚貝やクルマエビの好漁場であり、まさに宝の海でしたが、上中流域からの浮泥流入、生活排水対策の遅れ、人口増加などによる様々な影響等により、カキの増殖やカキ殻の堆積、泥浜干潟の拡大、漁業者の減少などから、１９８５年頃から漁獲量は年々減少し、２００１年には5分の1程度にまで落ち込んでいます。中でも、アサリは壊滅状態であり、山口市の採貝漁獲量は１９７５年で６５３トンであったものが、１９９１年以降は０～５トンでほとんど漁獲されていません。１９９０年頃までは大変盛んであった地域住民の潮干狩りも、現在では全く見ることができなくなりました。

また、様々な生物の産卵や生息場所となるアマモ場は、かつて山口湾のほぼ全域で約７００ｈａ分布していましたが、２００２年には、約３０ｈａに激減しています。

さらに、以前に比べれば、魚、野鳥など、生息している生物の量、種類とも減少しており、山口湾の干潟の生態系に改変・改質が生じてきています。

このため、干潟の生態系に影響を及ぼしている流域全体の現況調査を行った上で、上流から下流までの環境関連プロジェクトを盛り込み、産学官民の協働作業により『やまぐちの豊かな流域づくり構想（椹野川モデル）』が２００３年3月に策定されました。また、この構想に基づき、山口湾では、干潟の再生やアマモ場の造成に係る実証試験、野鳥などの調査、海浜清掃等を関係主体が連携して、様々な取組を進めているところです。

この豊かな流域づくりの一環として、河口干潟等の再生の取組を効果的に進めるには、自然再生推進法による枠組みを活用することが有効との判断から、地域住民、ＮＰＯ、学識者、行政機関などで構成する「椹野川河口域・干潟自然再生協議会」を２００４年8月に設立し、地域の多様な主体の参画による合意形成と、産学官民の連携・協働による取組を進めてきています。

三　自然再生の理念・目標、取組内容

(一)理念・目標

椹野川河口域・干潟の自然再生の理念・目標は、次のとおり全体構想に定めています。

①自然再生の３つの視点

・椹野川河口干潟等の生物多様性の確保

・多様な主体の参画と産学官民の協働・連携

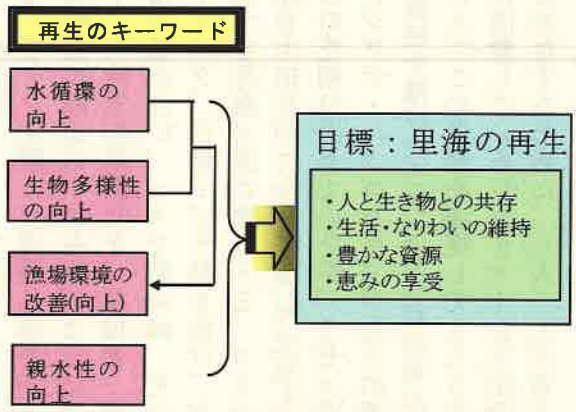
・科学的知見に基づく順応的取組

②人が適度な働きかけを継続することで、自然からのあらゆる恵みを持続的に享受できる場、いわゆる『里海』の再生を目指す。

③再生の方法

・「やれることからやっていく」

・悪化した原因やメカニズムを科学的に探求しながら、順応的に再生



椹野川河口干潟等の再生の方向性

④具体的な目標

河口干潟等の目標については、場所によって様々な自然・社会状況が異なることから、自然再生のゾーニングを行っています。

(二)干潟再生の取組

干潟再生の取組については、２００３年度の干潟の詳細現況調査から着手し、２００４年度には、カキ殻が分布している中潟では置換実証試験、砂干潟や泥干潟の南潟や新地潟での耕耘実証試験を行いました。そして、その結果等を踏まえて、２００５年度には、中潟では拡大実証試験、南潟では地域住民、関係団体と一体となって、人手による耕耘試験を進めています。

●住民参加による干潟耕耘実証試験等

アサリの減少等により干潟を掘り起こさなくなった結果、表面の砂が硬く締まって生物が棲息しにくい環境となった砂干潟（南潟）では、今でも何とかカブトガニが産卵し、幼生が生息しています。このため、重機等は使用せず、人力により、鍬やスコップで耕耘を行い、干潟の環境改善、生態系保全機能の維持に努めています。２００６年４月、１０月には漁協をはじめとする関係団体や住民等の参加により、干潟耕耘（うね耕耘、やま耕耘）、竹柵立て（ナルトビエイの食害対策）、アマモ苗移植などを実施しました。

２００７年３月までのモニタリング結果では、２００４年度には秋以降殆ど見られなかったアサリ等二枚貝の稚貝やクルマエビの稚エビが確認できるような効果が現れ始めています。

また、こうした作業に併せて、参加者を対象とした干潟生物の観察会も実施しており、地域住民等への干潟再生に係る普及啓発等を行っています。

椹野川河口干潟（南潟）での耕耘の様子

本年度までは、県が実証試験として事業化していますが、来年度以降については、地域住民や漁協等関係団体の皆様の力を合わせて、協働・連携により、干潟再生に取り組んで行かなければなりません。里海の再生には、まだまだ時間や人手がかかります。やまぐち自然共生ネットワークの皆様も是非、ご協力くださるようお願いします。

椹野川河口域・干潟自然再生協議会事務局

（山口県環境生活部自然保護課）

共生随筆

自然にアプローチする「窓口」を

今から11年前の夏、上越新幹線の上毛高原駅に初めて降り立ちました。尾瀬での宿泊研修会に参加したのでした。研修会の三日目はアウトドア体験、「自然環境の重要さを実体験する」ことを主題に、尾瀬ヶ原をハイキング。体験集に感想の一部を次のように書いています。「待望の尾瀬行き、参加者一同、朝から落ち着かない。バスで鳩待峠、そこからがハイキング。白樺・ブナ林を抜け、水芭蕉の自生する尾瀬ヶ原に踏み入る。ゴミ一つない湿原を木道を列になって進む。天気も上々、水芭蕉の花期は過ぎていたが、オゼコウホネ・ヒツジグサ・ニッコウキスゲなどの湿原植物や、湿地を飛び交う虫たちに目が奪われる。多くの人にこの自然を満喫してもらうために、地道に活動しているレンジャーにも出会った。自然と共存するために、一人一人が考えなければならない事を知った。」

今夏、盆過ぎに、再び上越新幹線で群馬県高崎市に向かっていました。応用量子研究所で開催される、理科学習教材体験研修会に参加するためです。車中、シートに備えられたJR東日本編集の小冊子「トランヴェル」（8月号）を手に取りました。特集「国立公園への招待状～信州、地球にやさしいエコの旅～」とありました。ページをめくると、自然を守り、自然を体験し、自然から学ぼうとするエコツーリズムの実践地として相応しい場所が国立公園であること。上高地で活躍するインタープリターたちの様子が、印象的に紹介されていました。

私は、環境問題や環境教育、自然との共生を考える時、多様な自然や環境にアプローチするための「窓口」を持つべきだと考えます。それは花であったり、虫であったり、写真であったり、登山であったりするかもしれません。一人一人が「こだわり」を持って、エコを考えたいと思います。

久しぶりの上越新幹線でした。群馬県内は40℃を越える記録的な猛暑でした。

増野和幸（上関町立上関中学校）

かたつむり観察会（秋吉台エコミュージアム）

クモを調べてみませんか

クモ類は人の生活空間に同居する、最も身近な生き物の一つです。家屋内から野外まで様々な環境に生息しており、眼にする機会も多い。

「クモ好き」には滅多に出会えませんが、「クモが怖い、嫌い、汚い」という人には出会ことが多い。かねてより、一般の人達がどの程度クモの事を知っているか知りたいと思っていました。

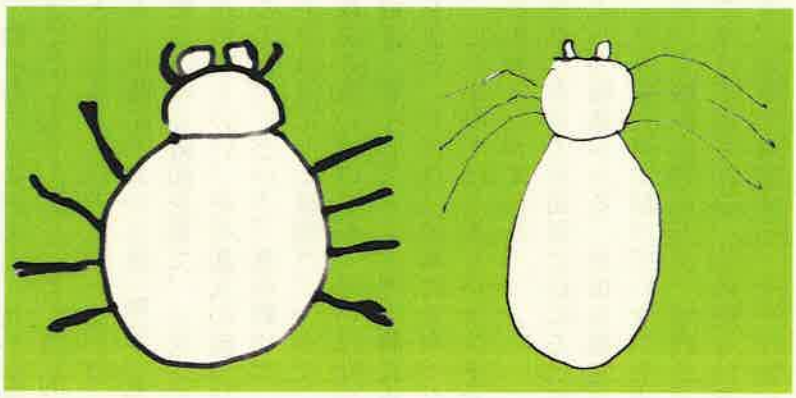
先般、秋吉台でクモ観察会が開催された折に参加者の皆さんに「クモテスト」なるものをやってもらいました。テストの内容は「クモの姿を描いてみよう」「クモの眼はいくつですか。どんな形で並んでいますか?」の二つで、それぞれ図示してもらいましたので結果の一部をご紹介します。皆さんなら、どんなクモを描きますか。

山口県では一九五〇年代に山口大学が見島の総合調査をおこなっており、その中で一〇科一八種のクモが報告されています（萱嶋一九五一）。その後、山口県立博物館が中心となって県下全域の調査が行われ二二科一二四種の山口県産クモ類目録が作成されました（八木沼・村井一九六〇）。防府市の村井工一さんは一九六一年から広く県内各地の調査を行い、一九八九年まで逐次「山口県の自然」で報告をしています。

二〇〇〇年代になって日本蜘蛛学会では、クモ研究の基礎資料としての県別クモ類目録を作成することになりました。前回の目録作成後の様々な報告に、個人の採集記録をくわえて整理した結果、四〇年ぶりに四二科二九五種の山口県産クモ類目録を再作成しました（増原二〇〇六）。

最近になって奄美・沖縄地域の多くの新種のクモが報告され、日本のクモは一四〇〇種になっています。他の都道府県の目録をみると、各地域とも平均的に、日本に分布するクモ種数の三分の一程度の種数が記録されています。ということは山口県でも、まだ一〇〇種以上のクモが分かっていないことになります。

ゴミグモ属は日当たりが良く、開けた場所に円網を張る見つけやすいクモです。最近下関市の住宅地でゴミグモ属のマルゴミグモをたくさん見ました。過去の記録は、一九九〇年に秋吉台の草原で見つかっている一頭だけです。このクモは近年急激な北上傾向を示しているそうで、温暖化との関りあいが推測されます。この様にクモ類を環境変化の指標として活用することも考えられています。



山口県のクモ類にはまだまだたくさんの解析すべくテーマが残っており、フィールドにはたくさんの楽しい発見が待っています。ぜひ写真図鑑を片手に出かけてみて下さい。

増原啓一（美祢市）

野生動物との関係

野生動物の農林作物被害は、今深刻な問題になっています。人が農業を始め、森や山を切り開き、田畑を築いたときから、野生動物との軋轢は始まったと考えられます。

二〇年以上前になりますが、当時年間に一〇〇頭近く、イノシシ猟の成果をあげられている方におめにかかりました。地域の自然に熟知し、山を知り尽くしているとても穏やかな方でした。体験的に得た知識や知恵はものすごく、延々と動物の話を伺うことができました。

狩猟は受け継がれてきた伝統文化です。罠をかける技術ひとつとっても、動物の生態、地形、植生、天候とありとあらゆる知識と経験に裏打ちされた技があって、はじめて獲物をとらえることができるのです。現在の野生動物の農作物被害は、細々と受け継がれてきた狩猟文化をはじめ、地域で育まれてきた伝承文化が消えていくことへの警告のように思えてなりません。

私たちは猟師の方をはじめ、地域の自然の中で暮らし、経験と知識を持った方々に学び、もう一度地域の文化を結びなおさないといけないと思います。

田中　浩（山口市）

花の伝説

野の花はとても美しい。誰も、花に出合うと、文句なしに感動し、うっとりする。花は長い歴史を通して昆虫たちの関心を集めるように進化してきた。

人は考える動物だから、美しい花を前にすると、様々なことを考える。花の伝説を探ると、花は人の化身というものが圧倒的に多い。花は人になり、人は花に変わるのだ。

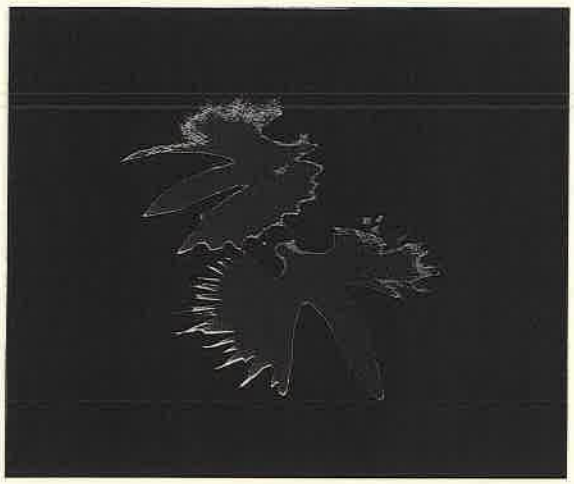
詩人　伊藤左千夫の小説「野菊の墓」では、秋の野辺に咲く野菊を見て、「民さんは野菊のようだ」といい、その恋人の政夫は「リンドウのようだ」という。秋の野では、野菊とリンドウは対になる植物だ。やがて、民子さんは政夫を慕い続けるが、思いは叶わず、他家に嫁ぎ、若くしてリンドウを胸に抱いてこの世を去る。この話は映画にもなった悲恋物語だ。この小説では、美しいリンドウの花は政夫の化身となっている。

サギ草は東京の世田谷に伝わる伝説では、次のような物語がある。世田谷城主が美人の町娘（サギを大事に飼っていた）を妻にしたいと云って城内に迎えるが、城内の女達の悪い噂で女は追放される。その時女は身ごもっており、川原で自害する。その川原にサギの形をした草花が育った。これでこの草をサギ

草と呼んだ。

こんな伝説は全国にいっぱいある。日本人は昔から、こんな方法で身近な生き物たちと心を通わせてきた。大げさかも知れないが、時にはサギ草を見ては物語を思い出し、涙を流した。いや、もっと身近な人を思いだしていたのかも知れない。

科学時代では、真実を追究するあまり、人々はこんな話には耳を傾けないかも知れない。でも、私には、秋吉台の草や虫を見ると、私の心の中に様々なことが連想され、物語が浮かんでくる。草原のエコツアーでは、アキヨシアザミを囲んで、参加した人々とそんな物語を話し合うのも楽しみにしている。



編集後記

「共生」誌も創刊から三年が過ぎ、第六号を出版する運びとなりました。手探りの状態で会誌づくりは進められてきましたが、内容や出版形態など、おおよその方向も次第に定着してきたように思われます。

本号では、やまぐち自然共生ネットワークで取り組んだ三つの事業「リレーミーティングin角島」「モデルエコツアー」「自然共生ミニシンポジウム」の概要のほか、前号から引き続いて、特集「山口の自然はいま」、「共生随筆」を掲載しました。投稿をいただいた方々には心よりお礼を申し上げます。

本年から会の活動を活性化するため、会の支部組織もでき、役員も変わりました。今後も各地で自然保全に正面から取り組んでおられる方々の声をより多く掲載し、共生社会のすばらしさ、楽しさを追求する内容としたいと思っています。そして、山口の美しい自然を後世に残す活動の輪がさらに拡がることを願っています。

日々の活動で思うことなど、自由な意見をどしどし投稿していただければと思います。

皆様のご協力を心からお願いします。

編集係

会員大募集！

十二月一日現在の会員数は次のとおりとなっています。

団体会員　六十二団体
個人会員　百七名

※今年の入会者数
団体　四団体
個人　十三名

近所やお知り合いの方に声をかけてネットワークの輪を拡げましょう。